



写真-1 加古川に架かる大門橋（令和2年5月撮影）

■ 加古川舟運で栄えた大門河岸

写真-1 は、加古川に架かる一般県道 350 号・松尾青野ヶ原停車場線の大門橋（だいもんばし）を右岸堤防上から撮ったものです。かつて大門橋の左岸側一帯は大門河岸（だいもんがし）と呼ばれ、高瀬舟の船着場と物資集積の町場ができ、多くの人が集まり賑わっていました。

加古川では、滝野から下流の舟運が開かれた文禄3（1594）年から播州鉄道が開通した大正2（1913）年までの約 320 年間、高瀬舟が加古川流域の南北の動脈として活躍していました。高瀬舟の主たる役割は、沿岸の領主たちの年貢米や商人米を河口の高砂港へ運ぶことでした。

そのため、川沿いの村には河岸（かし）と呼ばれる船着場と物資が集まる町場ができました。本郷・船町・上滝野・新町・大門※1・栗生（あお）・市場・国包（くにかね）などが賑わいましたが、中でも渡し場（大蔵神社西）・中港（洗濯場）・下港（水神さんの下）の3ヶ所の船着場を持つ大門河岸は、旗本八木氏の大庄屋であり掛屋※2でもあった蓬莱家を中心に数軒の商家がかたまって町場を形成していました。

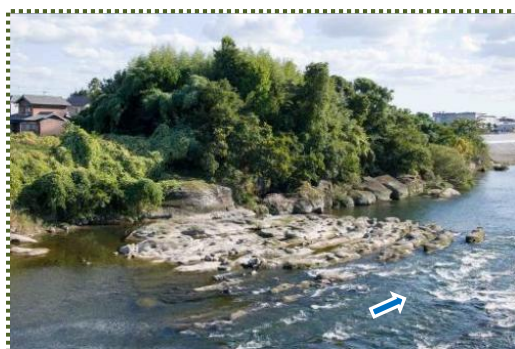


写真-2 大門橋から下流部を撮影

※1 大門：江戸期～明治22（1889）年の村名。慶長5（1600）年姫路藩領、元和3（1617）年幕府領、正保2（1645）年赤穂藩領、元禄14（1701）年幕府領、同16（1703）年からは旗本八木氏の知行。明治22（1889）年4月1日、町村制の施行により、大門村・西古瀬村・福吉村・上田村・沢部村・東古瀬村・中古瀬村・屋度（やど）村・東実（とうじつ）村・古川村・久保木村の区域をもって福田村（当地域の昔の呼び名・福田庄が由来）が発足。昭和30（1955）年3月31日、社町・米田村・上福田村・鴨川村、福田村が合併し、改めて社町が発足。

※2 掛屋：江戸時代、幕府や大名の蔵屋敷に出入りして、蔵物の処分、売却代銀の出納、送金を扱い、金銭の融通や両替などに当たった御用商人。諸藩の金融機関として、多く、扶持米を受け、用人、留守居役格の待遇を受けていた。蔵元。銀掛け屋。

■ 加古川筋でも屈指の町場だった大門河岸

江戸時代の後期には、加古川流域において37ヶ所の船着場があり、300艘の高瀬舟が運用されていたといわれていますが、元禄14(1701)年の「大門村高反別并永荒諸色指出」には「高瀬舟十四」との記載があり、大門村では14人の舟持が毎年船役米(ふなやくまい：1艘につきいくらか額が決まっている、税の一種)として7石2斗を領主浅野内匠頭へ納めていたそうです。

百姓たちが領主に年貢を納める場合、まず各村の郷蔵(ごうくら)に集めて査定を受け、牛馬の背で河岸へと運び、高瀬舟で高砂へと運びます。これを津出しといい、各村の津出場は決められていて、大門河岸には東条川流域のほとんどの年貢米・商人米が運ばれてきました。

14艘の高瀬舟を所有していた大門河岸では、運ばれてきた年貢米・商人米を高瀬舟に積み込んで高砂まで運び、戻り舟で塩・干鰯(ほしか)・雑貨などを持ち帰ります。大門にはこれらを売買する多くの店舗があって、加古川筋でも屈指の町場を形成していました。

なお、明治7(1874)年の調べによると、大門村では高瀬舟を持って運送業を営む船主、すなわち問屋が6人いて、合計9艘の舟を所有していたそうです。

高瀬舟の大きさは、長さ6間(≒10.9m)、表船梁・艫船梁1間(≒1.8m)、胴船梁8尺(≒2.4m)、深さ1尺6寸(≒48cm)だったそうです。

舟子は船頭(おやじ)・艫乗(とものり)・中乗(なかのり)の3名。積載量は川水の状態にもよりますが、常水で5斗俵(≒75kg)を60~80俵積んだそうです(米1石の重さは約150kg、1石=10斗)。

就航期間は、井堰が取り払われる秋の彼岸から農作業が始まる八十八夜^{※3}まで。大門から高砂まで約8里(≒31.4km)を4時間で下ったそうです。

※3 八十八夜：立春から数えて88日目に当たる日のこと。暦の上ではこの日から夏になる。

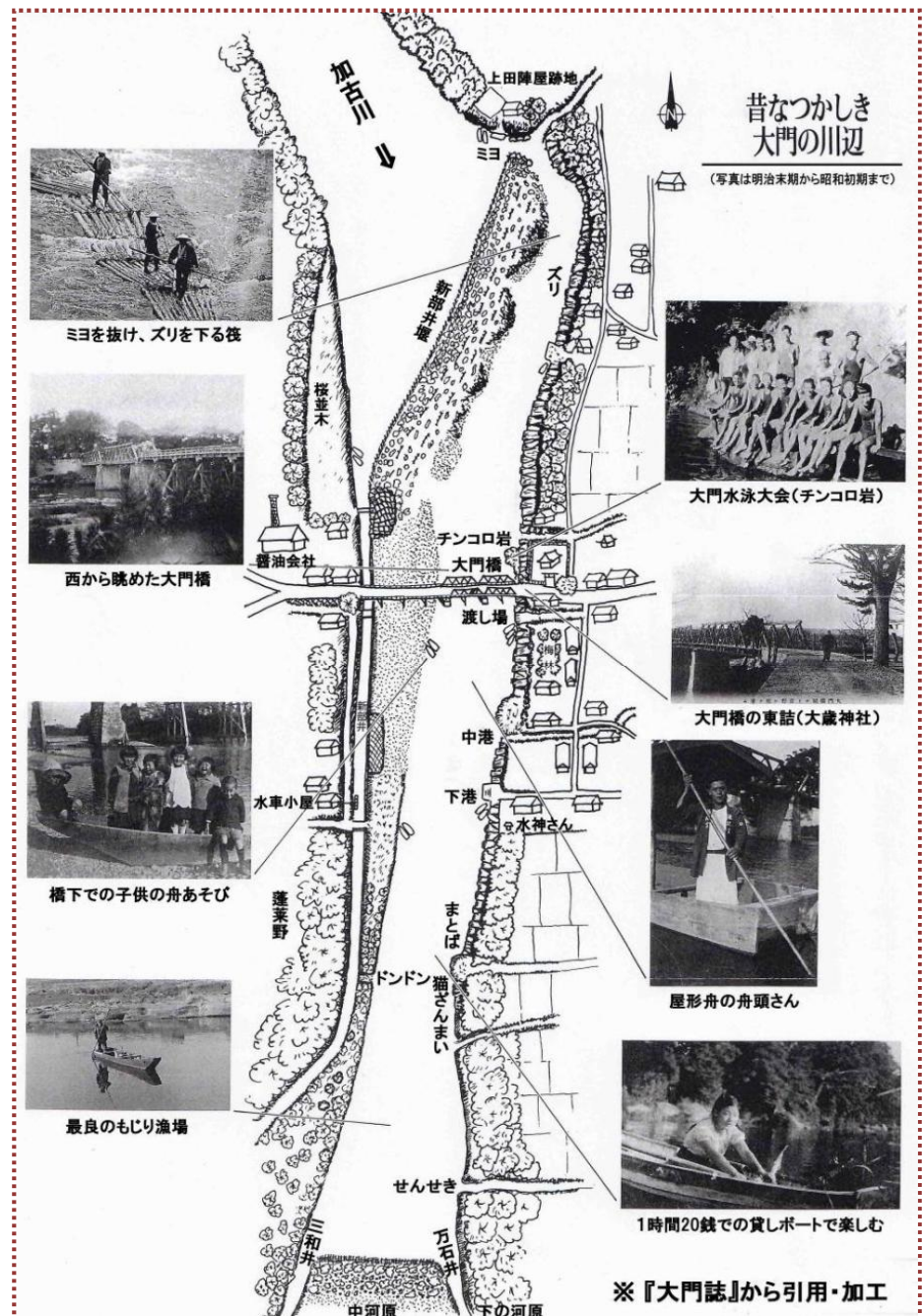


図-1 昔なつかしき大門の川辺

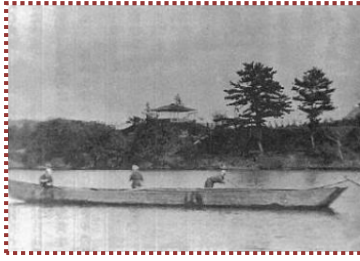


写真-3 上田陣屋前の加古川を下る高瀬舟
(『大門誌』から引用)

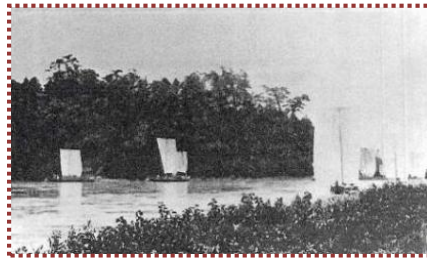


写真-4 大門まとはば付近の戻り舟
(『大門誌』から引用)



写真-5 中港の舟つなぎ
(『大門誌』から引用)

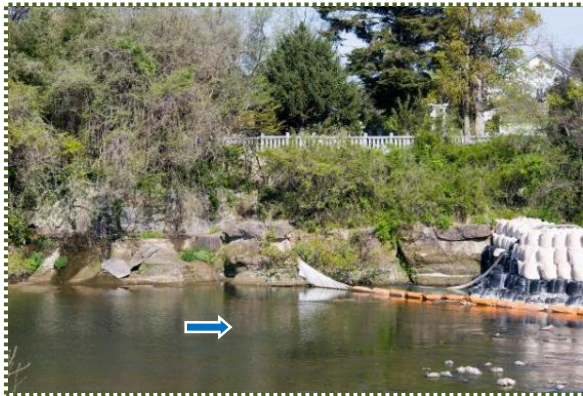


写真-6 大門橋上流左岸側(玉垣は移転前の大蔵神社)

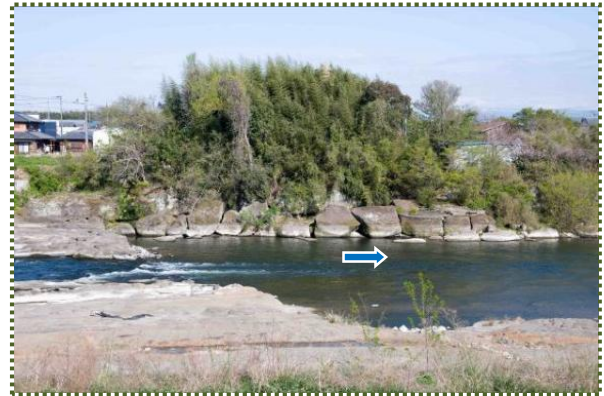


写真-7 大門橋下流左岸側

■ 播州鉄道の開通により加古川の舟運は終焉を迎える

瀬戸内海側から加古川筋を通り日本海側の舞鶴を結ぶ鉄道計画が、明治時代中期から幾度も立案されますが、いずれも実現することはありませんでした。

明治 43 (1910) 年の軽便鉄道法、翌年の軽便鉄道補助法の公布により、民営鉄道の建設・運営の規制緩和と財政補助が行われ、軽便鉄道ブームが起こります。そのような中、同年 11 月 1 日に加古川水系の舟運を代替する目的で「播州鉄道の敷設免許申請」が内閣総理大臣あてに出されます。

創立発起人 12 名の筆頭には河合村の斯波(しば)与七郎、2 番目に福田村大門の石井徳次の名があがっています。

明治 44 (1911) 年 1 月 25 日に認可され、5 月 18 日に播州鉄道株式会社が設立されました。高砂 - 西脇間 38.9km とその枝線を含む合計 60.5km の間に軽便鉄道の敷設と旅客・貨物運輸の営業を申請します。同年 6 月 29 日に工事施行認可を申請し 9 月 7 日に認可、明治 45 (1912) 年 3 月 1 日から建設工事に着手しました。

大正 2 (1913) 年 4 月 1 日、加古川町駅 - 国包駅(現・JR 加古川線厄神駅)間が開業、同年 8 月 10 日に国包駅 - (野村駅: 現・西脇市駅) - 西脇駅間が延伸開業、併せて市場停留場・小野町駅・粟生駅・河合西停留場・大門口駅※4(現・青野ヶ原駅)・社口駅(現・社町駅)・仮滝野駅(現・滝駅)が開業します。

近世の初頭から加古川流域の動脈として活躍した高瀬舟も、大正 2 (1913) 年の播州鉄道開通とともにその役割を終えます。特に、同年 8 月対岸に大門口駅ができると、積荷のすべてが鉄道に奪われ、大門河岸は川筋の河岸で最も早く舟運が閉じられたそうです。

※4 大門口駅: 大正 2 (1913) 年 8 月 10 日、播州鉄道 国包駅 - 西脇駅間の開通と同時に大門口駅として開業。旅客・貨物の取扱を開始。大正 5 (1916) 年 11 月 22 日、播鉄大門駅に改称。大正 12 (1923) 年 12 月 21 日、路線譲渡により播丹鉄道の駅となる。昭和 18 (1943) 年 6 月 1 日、播丹鉄道の国有化により、鉄道省加古川線の駅となり、同時に青野ヶ原駅に改称。昭和 62 (1987) 年 4 月 1 日、国鉄分割民営化により西日本旅客鉄道(JR 西日本)の駅となる。

■ 今も残る往時の町並み

大門村では、近世の中頃から蓬莱家が商業資本家として台頭してきます。蓬莱家は、掛屋・問屋・造酒屋を兼ね、領内外の米を所有の高瀬舟で高砂まで運んでいました。蓬莱家の周辺には、数軒の船問屋と干鰯屋、油屋、材木屋、棉（綿）屋などの商家がかたまって町場を形成していました。



図-2 加東市大門付近の地図

今も大門の町には、下の写真のような旧家やレトロな建物があって、加古川沿川でも有数の河岸として栄えた往時の面影がわずかながら残っています。

写真-8 は「福田村道路元標」で、旧東播銀行大門支店近くの県道松尾青野ヶ原停車場線沿いに設置されています。本来道路元標は、市町村役場の前か市町村の中心となる主要な道路同士の交差点に設置されるものですが、この位置に福田村役場があったわけではないので、おそらく県道松尾青野ヶ原停車場線と現在の市道との交差点（ちょうど旧大庄屋邸の南東角付近）ということで道路元標が設置されたものと思われます。

写真-9 は、明治 29（1896）年に建てられた旧東播銀行大門支店の建物です（現在は個人邸）。

写真-10 は、大門橋の東約 100m にある旧大庄屋邸。



写真-8 福田村道路元標



写真-9 明治 29 年に建てられた
旧東播銀行大門支店



写真-10 旧大庄屋邸

■ モノローグ

江戸時代、3ヶ所の船着場を持っていた大門村の人々は、水辺で洗濯をし、子供らは水泳や舟遊びをするなど、水辺とともに暮らしていましたが、今、船着場周辺は雑木・雑草が生い茂っていて水辺に近づく人もいない状態です。

現在、国土交通省近畿地方整備局の姫路河川国道事務所による河川改修が進められていて、大門地区は緩傾斜護岸が施工されています。なので、水辺に近づきやすくなりますが、3つの船着場跡やチンコロ岩、まとは、猫ざんまいなどは拡幅により掘削除去されてしまうようです。

ナヨクサフジ（弱草藤）

マメ科ソラマメ属の一年草。春も終わりに近付き、初夏の香り漂い始めた頃に開花する。野原や河原などに繁茂する帰化植物。よく似た花にクサフジがあるがこちらは多年草。花や葉が良く似ているが、クサフジの開花期はナヨクサフジより少し遅く夏である。見分け方はクサフジに比べて、ナヨクサフジは花の上唇部分がめくれ上がっているのが特徴だが判別は難しい。大門橋右岸下流の河原に咲いていた。



写真-11 ナヨクサフジ（令和2年5月）

【参考資料】

- 1 『社町史第二巻・本編2』 社町 平成17年9月
- 2 『新修加東郡誌』 加東郡教育委員会 昭和49年9月
- 3 『大門誌』 社町大門 平成4年3月
- 4 『兵庫県社町～大門村』 角川地名大辞典
- 5 『掛屋・懸屋』 精選版日本国語大辞典
- 6 『加古川は水運として江戸時代の兵庫の交通と物流の要だった！』 まっぶるトラベルガイド 2024年1月
<https://www.mapple.net/articles/bk/8357/>
- 7 『加古川舟運の衰退に伴う河岸景観の変貌』 小林ひろ子 平成4年3月
- 8 『「八十八夜」はいつ頃の季節のことをいうのですか。』 農林水産省HP 平成30年4月
<https://www.maff.go.jp/j/heya/sodan/1804/01.html>
- 9 『福田村、加古川線、青野ヶ原駅、クサフジ』 フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』
- 10 『ナヨクサフジ』 LOVEGREEN ホームページ
https://lovegreen.net/flower/p205629/#goog_rewarded

※発行：令和5（2023）年2月 『ひょうご水百景』No.166

改訂：令和8（2026）年7月 『ひょうご水百景』No.166